

学校における教育相談の在り方と内容について

カウンセラー研究員 渡辺 克己(川崎市立井田中学校)

I 主題設定の理由

現在、学校では継続課題となっている不登校の問題やいじめ、暴力行為について、教育諸機関の調査や研究を受けて、関係機関による講演や研修会が行われている。しかし、新たな問題や課題が次々に挙がり、その対応に苦慮している現状がある。

日頃、学校で生徒と接する中、社会の著しい変動とともに、生徒を取り巻く生活環境に変化を感じるようになった。それは、生徒同士の会話からも伺うことができる。地域では少子化による子ども会組織の縮小や地域行事の減少も見られる。また、家庭では保護者の仕事の多忙や子どもの塾通いにより、子どもは人と接する機会を失い、人と対話する時間も少なくなっているのではないだろうか。

そのため、学校では仲間とのかかわりを持った授業の推進が行われている。また、学校行事では生徒が行事の企画や運営をして、所属感や集団性を養う機会にしているところもある。休み時間には、親しい仲間と笑顔で会話する生徒の光景が見られる。しかし、その一方で、相手の心情や受け止め方を考えず、自己中心的な考えによりトラブルが発生することもある。また、自分の感情や考えを相手に上手く伝えられず、人とかかわることの難しさを抱えている生徒もいるように感じる。さらに、この数年、携帯電話によるトラブルが学校で報告されるようになった。携帯電話のトラブルは、匿名性が高く教師や保護者の知らないところで起きていることもある。

不安や悩みを抱えた生徒は、身近な周囲の人へ相談せず、自分で解決を試みる傾向が見られる。しかし、その中にはトラブルが未解決のまま継続しているケースもあり、悩み苦しむ生徒も多くいる。

それらの報告を受けるたびに、人とのかかわりの希薄さがこのようなトラブルを引き起こしているため、人とのコミュニケーションが必要になるのではないかと感じるようになった。

そこで学校における教育相談が、人とのかかわりの希薄さによるトラブルを未然に防ぐための機会の一つとして、とらえることができるのではないかと考えた。そのため、現在学校が抱えている様々な課題を整理する中で、教育相談週間の持ち方や相談活動の具体的な方法、学校行事への位置づけの見直しを図っていきたいと考え、上記の研究主題を設定した。

II 研究の内容

1 学校が抱えている課題

(1) 継続的な課題

①不登校児童生徒の推移

平成 10 年に学校基本調査の区分より「不登校児童生徒」という言葉が教育現場に入ってきて、10 年が経過しようとしている。川崎市における不登校児童生徒数の推移を見ると、平成 9 年度の不登校児童生徒数は小学校 243 人(出現率¹⁾0.39%)、中学校 885 人(出現率²⁾3.18%)であり、翌年の平成 10 年度は小学校 245 人(0.40%)、中学校 1,050 人(3.84%)となり、中学校で 1,000 人を超える結果となった。また、近年のデータを見ると平成 17 年度は小学校 190 人(0.29%)、中学校 1,169 人(4.69%)であり、平成 18 年度は小学校 179 人(0.27%)、中学校 1,182 人(4.69%)となった(年刊教育調査統

¹⁾ 出現率 川崎市内小学校不登校児童数÷川崎市内小学校全児童数×100

²⁾ 出現率 川崎市内中学校不登校生徒数÷川崎市内中学校全生徒数×100

計資料 No. 35 2007 川崎市教育委員会 平成 20 年 1 月)。川崎市内の小中学校では、不登校児童生徒の発生を未然に防ぐために、児童生徒指導担当者会議をはじめとする諸会議で、講演や研修会が開催されている。また各小中学校では継続的に不登校児童生徒に関する研修会や会議が行われている。

②相談室の活用

不登校生徒の対応は、本校においても継続課題になっている。平成 17 年度よりスクールカウンセラーが市内公立中学校全校に配置され、専門的な立場からのアドバイスが得られるようになった。本校でもスクールカウンセラーは、相談室において校内相談活動のほか、保護者からの電話相談や面接も実施している。しかし、生徒は相談室を特別な場所としてとらえている。その点を改善するために、スクールカウンセラーによる定期的な便りの発行やリラクセス体操会を開き、生徒との距離を縮めて気軽に相談室を利用できる試みをしている。その結果、現在は不安や悩みを抱える生徒にとって、安心できる空間として認められつつある。さらに、本校ではスクールカウンセラーが職員研修会で講師となったり、相談室の利用状況や相談活動の報告、職員との連携や協議を重ねたりすることで、相談活動の重要性や意義が職場に浸透してきていると感じる。

③集団生活の不応

現在、本校では話し合い活動やグループによる調べ学習が学級や授業で盛んに行われている。その様子は仲間と和やかな雰囲気や課題に取り組む光景や互いの意見を大切にしたい意見交換も見られている。しかし、生徒の中には行事などの集団活動の場面で、周囲の仲間と上手くかかわりにつくれずに、戸惑いや不安を感じる生徒もいる。また、自分の感情や考えを相手に上手く伝えられないことで、人とかかわることの難しさを抱えている生徒もいる。特に、新学期当初や集団の規模が学級、学年、全校へと変化する学校行事において、自分を取り巻く環境に変化が生じる場合に見られることがある。

(2) 新たな課題

①問題の傾向

本校では、休み時間の終了時や下校時の校門付近で「家に帰ったら携帯するね」や「塾の帰りにメール送って」などの言葉が挨拶代わりに交わされ、携帯電話の所持率が高いことが伺える。それに伴い学校は、携帯電話による被害や相談を受けることが多くなった。当初は無差別に送られてくるチェーンメールが主であった。しかし、徐々にエスカレートして中傷メールやなりすましメールの被害報告を受けるようになった。また、メールでは相手の心情や受け取り方を考えずに、簡略化した内容や俗語を交えることで、正負どちらにも受けとれる内容から、相手に不信を感じてトラブルになることもあった。

②新たな問題

この数年、学校ではプロフィール（自己紹介）サイトの開設に伴うトラブルが報告されるようになった。サイトを開設している生徒は、無料で開設ができ、指定された項目に沿って打ち込むことで、簡単に自己紹介ページが作れるところに魅力を感じているようである。自己紹介ページには、毎日の出来事が交換日記を交わす感覚で更新されている。そして、紹介項目のハンドルネーム（ページ上での名前）は、匿名性が高く興味を引くように工夫されているが、個人写真の掲載や住所、学校名、クラス、出席番号、部活動名、委員会、係が記載され、個人が特定できてしまう内容も多くある。

社会変化が著しくなった今日、テレビや新聞紙上等で「個人情報の保護」や「ネチケツ」という言葉を聴く機会が増えている。学校では生徒や保護者を対象にして、講師を招いた講演や学習会が開かれている。しかし、実情はインターネット上で不特定多数の閲覧者に、個人情報を公開する結果になっている。また、サイトに書き込みをしにくる者の範囲に限界がなく、匿名の書き込みが多いため、

誹謗、中傷の書き込みが後を絶たない。場合によっては、生徒間トラブルや他校生を巻き込む学校間トラブルに発展するケースもある。

③問題の長期化

日頃より、学校はトラブルの早期発見や早期対応に努めている。しかし、トラブルの内容により、継続的な指導や経過観察を要することもある。そして、携帯電話のトラブルのように、匿名性が高く長期間にわたり、保護者や教師の知らない場面で継続していることもある。このようなトラブルが表面化するときは、多くの要因が含まれているため、解決するまで長期的な対応になることもある。

(3) 課題のまとめ

学校が抱えている課題や現状を整理すると、社会や生活環境の大きな変化に伴い、人とのかかわりの希薄さや規範性の低さが伺える。また、簡略化された内容や俗語を交えた言葉の使用もトラブルを助長していることが分かる。そして、トラブルの中には教師や保護者の知らない場面で起きていることもある。さらに、トラブルを抱えた生徒は、問題が大きくなることを恐れることや人に対する不信感により身近にいる人への相談を考えず、自分で解決を試みる傾向もある。時には、未解決のまま継続して、悩み苦しむ生徒もいる。これらの問題を未然に防ぐためには、教師が生徒の心情や本音に向かい合い、不安や悩みを共有できる教育相談の実施が必要になる。

2 研修や会議に参加して学んだこと

(1) 教育相談センターでの研修を通して

教育相談センターで行われている来所相談は、心理臨床相談員が子どもの発達やいじめ、不登校、友人関係、学校生活の相談や保護者の子育てに関する悩みを受けている。また、相談方法は来所相談や電話相談、家庭訪問相談、学校への巡回カウンセラー訪問といった多岐の方法を用いて、幅広いニーズに対応している。

教育相談センターでの相談は、心理臨床相談員の専門的な見解が得られるため、悩みを抱えた保護者や児童生徒にとって心強い場所となっている。さらに心理臨床相談員は、相談者の主訴や相談内容を真摯に受け止め、相談者に寄り添う姿勢をもっている。この姿勢は教師が生徒や保護者に接する場合や教育相談の場面において、参考になる大切な教師の姿勢であると感じた。

(2) 教育相談宿泊研修会を通して

教育相談宿泊研修会のねらいは、児童生徒が安心して自己の成長を図れるようになるための支援の在り方を、グループで体験を通して研修する場となっている。今まで数多くの研修会や講演会に参加する機会を得てきたが、宿泊を伴う研修のためどのような研修になるのか期待が膨らんだ。

研修室にはグループのメンバー男女10人が集まった。メンバーの表情からは、互いに初対面であるためか戸惑いや動揺を隠しきれない様子が伺えた。この状況は、学校現場に置き換えてみると、入学直後に緊張が張りつめている1年生の雰囲気、または転入生の心情に近いものを感じた。

①表情と心の変容

ファシリテーター（促進役）より自己紹介を勧められる。ゆったりと流れる時間を感じる中で、心の整理ができたときに、自らの判断で紹介の機会をとらえる演習であった。そして、自己紹介の終了後には心地良い気分が感じられた。それは、メンバーの一人一人が発言者に対してうなずきと柔らかな表情で最後まで丁寧に聴いてもらえているという安心を感じたからである。また、紹介が進むにつれて、メンバーの強ばった表情にも緩みが見られた。

この演習からも、教師は学校における教育相談の場面で、生徒の心情に共感する姿勢を持ち、言葉に耳を傾ける（傾聴）ことで、相談しやすい雰囲気や安心感を生徒に与えられることが分かった。

②相手を感じ取る

胸の前で手のひらをかざし、目を閉じて歩行する中で、互いに合わさった手のひらから相手を感じ取る演習であった。目を閉じると視覚からの情報が入らず不安になる。さらに、歩行による周囲の物や壁へ接触する不安が次々と湧いてくる。しかし、互いの手のひらが触れ合い、手のひらの形状や温もりを感じることで、息づかいや鼓動が伝わり不安が薄れる感覚を受けた。

このように、相手のことを感じる距離で、相手に寄り添い、見方や考え方を大切にして、相手の思いや気持ちを受け入れる（受容）姿勢は、生徒や保護者からの相談を受けるときや教師と生徒の信頼関係をつくる上でも心がけたい大切な教師の姿勢だと感じる。

③様々な視点から見えるもの

二人組をつくり、互いに10分間のスピーチを行う中で、相手の振る舞いや表情を含めた人間像をイメージする演習であった。この演習では、趣味や休日の過ごし方、あるいはこだわりなどについて、多くのメンバーと会話を交わすことができた。互いに共通した話題が見つかったときには、会話に広がりが見られ、相手のイメージが数多く湧いてくる。それぞれのメンバーより、自分では気づかない見方や感じ方を率直に伝えられたため、自己発見することができた。

学校で教師は生徒や保護者からの質問や意見を求められることがある。そして、生徒や保護者が自己を見失っている場合には、温かく誠意を持つだけでなく、時には教師の率直な意見を伝えることで、信頼関係が深まることがこの演習から分かった。

このように教育相談宿泊研修からは、共感的理解や傾聴、受容、率直な意見を伝えることの三姿勢を体験することができた。これらは、学校における教育相談の場面で実践されるべき大切な教師の姿勢であると感じる。

3 学校における教育相談の実践

（1）教育相談のとらえ方

日頃、生徒は明るく学校生活を送っているように見える。しかし、課題を整理する中で多くの生徒が何らかの不安や悩みを抱えていることを感じる。そのため教師には、生徒のよき理解者として一人一人の生徒とかかわり、不安や悩みを共有する姿勢を持つことが求められる。また、生徒の不安や悩みを早期に感じ取り、心情や本音を把握することで問題を未然に防ぎ、トラブルに対する解決能力をはぐくむ取組の必要性を感じる。その意味で学校における教育相談の場面は、大きな役割を担っているといえる。

「生徒の心情や本音に向かい合い、教師と不安や悩みを共有する」教育相談のポイントとして、次のことを念頭に置いて、学校における教育相談の実践を考えた。

- ① 生徒がどのような不安や悩みを抱えているか。多くの機会をとらえて把握すること。
- ② 生徒が抱えている気持ちや思いに対して、教師は生徒の心情に共感する姿勢をもって、生徒の言葉に耳を傾けること。
- ③ 生徒の見方や考え方を大切にして、生徒の思いや気持ちを受け入れる姿勢をもって、生徒理解に努めること。
- ④ 生徒から質問や意見を求められた場合や自己を見失っている場合は、温かく誠意をもって接し、教師の率直な意見を伝えること。

（2）相談週間の実施について

本校における教育相談週間の取組は、生徒、保護者、学級担任の三者により、三日間で行われていた。保護者の中には学期末面談と混同して、学習成果や学校生活に話題が集中する傾向が見られた。

そのため、多くの教師は教育相談の大切さや必要性を感じながらも、保護者の前で生徒の心情や本音に向かい合うことの難しさを感じた。この反省から、校内の生徒指導部会で、生徒の心情や本音に向かい合い、教師とともに不安や悩みを共有する教育相談週間の実施について協議がされ、次のことが決定された。

- ① 教育相談週間の形式は生徒全員を対象として、学級担任と生徒の二者で行う。
- ② 教育相談週間は生徒や教師が相談に集中できる、部活動停止期間に設ける。
- ③ 実施時期は前期期末考査と後期中間考査の前五日間の日程を確保する。
- ④ 原則として、相談は学級担任が受けるが、生徒の要望により他教師の対応を可能とする。

相談週間終了後には、学級担任から実施期間についての感想が寄せられた。次の二点が主であった。

- ・ 余裕を持った相談期間と時間にゆとりがあったため、内容の濃い相談になった。
- ・ 期間中は部活動が停止のため、落ち着いた雰囲気の中でゆったりと相談できた。

他に、1学年から「入学直後に相談週間を設定してもらいたい」という要望や3学年から「進路面談と重ならない時期の設定ができれば」など、各学年で実施時期を設定するといった意見も得られた。

（３）実態の把握について

生徒がどんなことで悩んでいるのかを把握するための試みとして、生徒には教育相談における事前アンケートの協力を願った。このアンケートは限られた日程と時間枠の中で、学級担任がスムーズな相談活動を進めるための資料として位置づけた。

アンケート回収後、職員室では各学級担任が興味深くアンケート用紙に目を通す姿が見られた。また、アンケート内容から、生徒の表情や振る舞いでは見えない小さな意志表示も記され、生徒の新たな一面を発見することもできた。このことにより、生徒の多くは不安や悩みを抱えていることが分かった。さらに、生徒の記述から「今まで相談する機会やきっかけを失っていた。この機会を大切にしたい」など、教育相談に対する生徒の思いが伺え、改めて生徒の意見を把握する大切さを教師が感じる場面にもなった。

（４）相談力の向上を目指した取組

生徒の心情や本音に向かい合う教育相談を実施するには、日頃から生徒に対する教師の姿勢が大切になる。特に、教育相談の場面において教師は、生徒のよき理解者としてかわりを持つことが必要になる。そこで、教育相談週間の事前に学級担任を対象に共感的理解と傾聴、受容、率直な意見を伝える三姿勢の場面研修を行った。この研修は、各学級担任が行ってきた相談のスタイルと講習後に課題をもって行った相談のスタイルの相違をロールプレイングで体験することをねらいとした。

実践1 今まで行ってきたスタイルで相談を実施する。

講習 共感的理解と傾聴、受容、率直な意見を伝える姿勢の重要性とポイントを講習。

次の3つにポイントを絞って講習を行った。

- ① 相手の話を肯定的にとらえること。
- ② 相手の話に豊富な相づちを打つこと。
- ③ 相手からの質問やアドバイスを求めている場合は、簡潔に応答すること。

実践2 共感的理解と傾聴、受容、率直な意見を伝えることを心掛けた相談を同事例で再実施する。

ロールプレイング終了後に実践1と実践2の生徒役の教師から感想が述べられた。

<実践1の感想>

- ・ 一方的に話を進めてしまうので、相談するタイミングがつかめない。
- ・ アドバイスをもらったが、沢山あり過ぎて自分に合った内容が見つからない。

- ・ 「～だけど。～でも」が多く、自分の考えを否定されている感じがする。
- ・ 相談とは違った内容に話題が逸れて、話を真剣に聞いてくれているのか不安になった。

<実践2の感想>

- ・ うなずきや表情から、一語一句かみしめるように聴いてもらえている感じが伝わった。
- ・ 話を真剣な表情で聴いてくれたので、自分の不安や悩みを話してみようと感じた。
- ・ 共感してもらえる言葉があったため、悩みや相談を受け止めてくれる安心を感じた。
- ・ 相づちが入り、辛さや苦しみを真剣に受け取ってもらえていることが伝わった。

Ⅲ まとめと今後の課題

本研究を通して、学校が抱えている課題を整理することや教育相談週間を活用して生徒と教師のかかわりを再考することができた。そして、生徒の心情や本音に向かい合う教育相談を実施するには、生徒にかかわりを持つ教師の姿勢が大切であることが分かった。そのため教師には、日頃から生徒と接する中で、相談しやすい雰囲気づくりや安心感を与えることが求められる。改めて、教育相談は生徒と教師の信頼関係の元に成り立っていることが分かった。

教育相談の事前アンケートでは、生徒の気持ちや一人一人の新たな一面が伺えたこと、また、学級担任の資料になったことは大きな成果といえる。さらに、場面研修では共感的理解と傾聴、受容、率直な意見を伝える教師の姿勢を伝達したことにより、各学級担任が教育相談を含めた生徒とのかかわりを振り返る機会にもなった。そのことにより、相談週間終了後には生徒から進んで教師に相談を依頼している姿が見られるようになり、相談しやすい雰囲気が生まれつつある。また、学級担任が放課後しばらく教室に残り、生徒とコミュニケーションを図る姿も見られるようになった。この取組により、教育相談の大切さや必要性が生徒と教師の双方に浸透してきている。

しかし、本校における教育相談活動の取組は、まだ初歩の段階に過ぎず、教育相談のとらえ方の定着と相談活動の継続には時間が必要である。そして、各学年に応じた相談週間の実施時期も検討の一つである。さらに、教育相談を枠としてとらえるのではなく、随時相談ができる雰囲気づくりも今後の課題として挙げられる。

今回の研究を通して学んだ教育相談の取組について、校内の研修会や会議など多くの機会をとらえて、広めていきたいと考えている。

最後に研究を進めるにあたり、この研究の機会を与えていただいたことに感謝するとともに、適切なご指導とご助言をいただきました教育相談センターの皆様、勤務校の校長先生をはじめ学校職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | | | |
|------|---------------------------|-------|-------|
| 今井五郎 | 『個々の児童・生徒に添う 生徒指導と学校教育相談』 | ぎょうせい | 1994年 |
| 河合隼雄 | 『河合隼雄のカウンセリング入門 実技指導を通して』 | 創元社 | 1999年 |
| 東山紘久 | 『プロのカウンセラーの聞く技術』 | 創元社 | 2002年 |

【指導助言】

川崎市総合教育センター指導主事

尾立 秋彦